

資本主義から市場を救出する

～ 近代化の多元性とスミスの発展 ～

Rescuing Market from Capitalism : Multiple Modernization and Smithian Development

三菱UFJリサーチ&コンサルティングでは、2010年度より、弊社の研究員およびコンサルタントの基礎的教養を高め、クライアントに対してより魅力的で洞察力のある知恵の提供ができるようになることを目的に、「学び」の場として『巖流塾』を開催しています。

この目的を達成するため、『巖流塾』では表面的な知識やスキルを習得する場所としてではなく、物事の実体、本質に迫ることができるようなテーマを用意し、自己鍛錬、塾生同士の相互研鑽の場を提供することを目指しています。

2011年度においては、『巖流塾』の活動テーマを「東日本大震災後の日本」と設定し、歴史的視点から日本文明のあるべき姿について塾生同士がそれぞれの専門分野における知見を持ち寄りながら、今後のあるべき日本の姿を構想していくことを目指しています。

そして、外部から有識者を講師としてお招きして、「東日本大震災後の日本」というテーマについて、有識者の方々とのディスカッションを軸に、あるべき日本の姿についての検討を進めることとしています。

お招きする有識者の第4弾として、立命館大学国際関係学部教授 山下範久氏に、「資本主義から市場を救出する：近代化の多元性とスミスの発展」と題した講義をお願いいたしましたので、ここに講義録を採録いたします。



Since 2010, Mitsubishi UFJ Research and Consulting has offered the company's researchers and consultants learning opportunities through the Ganryu Seminar to enhance their basic knowledge and enable them to provide interesting and insightful ideas to clients. To achieve this goal, the Ganryu Seminar is intended to be not merely a place for acquiring superficial knowledge or skills, but also a place where the participants can learn from each another as well as train themselves by engaging in themes that are connected to the reality and essence of issues.

In 2011, the theme for the Ganryu Seminar is "Japan after the Great East Japan Earthquake," and participants will discuss what the Japanese civilization should look like from a historical standpoint and create an ideal picture of the future of Japan by sharing their specialized knowledge in discussions. Also, experts from outside the company have been invited to lecture, and the seminar participants can further their ideas about an ideal Japan through discussions with them on Japan after the Great East Japan Earthquake.

Included in this issue of the journal is content from a lecture entitled "Rescuing Market from Capitalism : Multiple Modernization and Smithian Development" by Prof. Norihisa Yamashita, of Ritsumeikan University, who was the fourth invited lecturer at the Seminar.

はじめに：ウォーラステインにトッドを接続する

立命館大学の山下です。どうぞよろしくお願いいたします。

この講演に先立って、イマニュエル・ウォーラステインの『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立（1・2）』、エマニュエル・トッドの『帝国以後』、ジョン・グレイ『グローバリズムという妄想』を課題図書とさせていただきました。今日は、それらを踏まえて、その延長線上にどういう議論ができるのかということをお示しできればと思います。

ウォーラステインの書籍だけではなく、トッドとグレイの本を加えた理由は、「近代化の多元性」に焦点を当てたかったからです。従来の近代化論あるいは啓蒙主義的な主張の中では、「グローバリゼーションの進展とともに世界がある状態に収れんする、またはフラット化する」ということが言われてきました。実は世界システム論もこの例外ではない面があるのですが、現実には、近代化とは必ずしも一元的な状態に収れんするものではないのだということが分かってきました。

そもそも「近代」というものは、それ自体が抽象的な概念にしかすぎず、その概念通りの「近代社会」なんていうものは世界に存在したことがありません。実在するのは「過程としての近代化」ということがあっただけあって、「近代社会」そのものは実在しないわけです。

他方で、「プロセスとしての近代化」というものはプロセス、すなわち「歴史」ですので、決してゼロの更地から始まっているわけではありません。近代化が始まる前に、すでにさまざまな条件を背負った社会があるわけで、その上に「近代化」があるのです。

近代化以前のさまざまな条件、たとえば「文化的」条件等が、その後の近代化のパターンに偏差を生む、また、いろいろな種類の近代化が存在し、それらの相互作用が生じる中で近代世界システム自体のプロセスもあるのだということです。そのことは、ウォーラステインの議論だけを読んでいるとちょっと見えにくいわけなのですが、そこにトッドやグレイの議論を置くことで、



より見えやすくなると思います。

さて、まずトッドですが、実はトッドはもともと歴史人類学者で、『帝国以後』を執筆する前に結構重要な議論をしており、その点については『帝国以後』でも少し触れてはいるのですが、本人にとっては所与の前提として書いているような感じですので、その点について先に少しご説明したいと思います。その議論についての理解がないと、『帝国以後』だけを読んでも、何だかヨーロッパ主義者のイデオログみたいな印象で終わってしまうかもしれません。

そのトッドの最初の学術的業績とは、先ほど申し上げた近代化以前の条件について、ヨーロッパの中で4つのパターンに分けられるという議論です。一方の軸に「自由主義（リベラリズム）」と「権威主義（オーソリタリアニズム）」、もう一方の軸に「平等主義（エガリタリアニズム）」と「非平等主義（ノンエガリタリアニズム）」を設定して、2掛ける2で、合計4つのパターンが出てきます。

トッドの専門分野は人類学ですから、このパターンというものを家族の形態のパターンとして分析します。まず、ある社会が「自由主義的か、権威主義的か」という軸は、親子関係が指標となります。具体的には、成人した子供が親の言うことを聞くか、聞かないか。あるいは結婚しようがしまいが、成人した場合に親から独立して一家を構えるか、構えないか、ということを経験として、その社会が「自由主義的か、権威主義的か」を分類します。

もう一方の「平等主義的か、非平等主義的か」の軸については、兄弟関係が指標となります。ここで言う「兄弟関係」とは、要するに相続のことです。すなわち、相続にあたって長男が全部とるのか、それとも均分相続するのか、ということが一番典型的な指標です。このようにしてヨーロッパ社会を分類してみると、結構きれいに分かれるわけなのです。

ヨーロッパ社会の4類型：フランス型、イギリス型、ロシア型、ドイツ型

当たり前ですが、端的に言えば、「自由主義」的社會は子供が親の言うことを聞かない社會です。また、「平等主義」的社會は、財産を兄弟で均等に分ける社會です。フランスがまさにこういう社會で、「自由」と「平等」といえばまさにフランス革命のスローガンそのもので、いったん近代化が始まると、旧来の權威はまったく認めないし、最初からみんな平等だと思っていますから、一気に近代化に進むことになるわけです。あまりに一気に近代化するため、その過程では暴力的なことも起こる。これが「フランス型」なのです。

それに対して、親子関係は自由主義的な社會で、親の權威はあまり認めていないのですけれども、兄弟関係は平等主義的ではない、という社會が「イギリス型」です。

したがって、超越的な權威は認めないけれども、仲間うちではある種の垂直的な秩序というか、進んだ人と遅れた人、あるいはより尊敬されるべき人とそうでない人がやっぱりいる、という感覚を持っている社會です。このような社會においては、社會の序列の中でだんだんと競争して、いいものが残っていくようになる、という発想になります。これはイギリス型の近代化、改良主義的な近代化となります。イギリスは清教徒革命みたいに暴力的な革命もやっているわけですが、しかし、フランスに比べれば随分穏やかに近代化は進んだわけですね。

これに対して、親子関係が權威主義的な社會、すなわち、成人した後も子供がずっと親の權威に服し続ける、という社會もあるわけで、ロシアがそうなのです。ただ、ロシアは逆に兄弟関係は平等主義的なのです。つま

り、超越的な、大きな權威がひとつだけあって、ほかの民衆はみんな平等という社會がロシア的な社會であり、前衛党¹的な、あるいは少しメシア（救世主）的な近代化のパターンに非常によくなじむわけです。実際、ソ連が崩壊しても、プーチンがある種カリスマ的に支配している今のロシアとなるわけです。ロシアの大統領は街頭に出て行って民衆との対話とか、ああいうスタイルが好きじゃないですか。ああいうのはロシア型の近代化の姿と言えるかもしれません。

もうひとつのパターンが、親子関係は權威主義的で、兄弟関係が非平等主義的という社會です。このパターンでは、一番上のトップに權威があって、しかもその下の構成員もがっちり縦型になっているわけですから、上から下までピラミッド型の、軍隊みたいな組織ができ上がるわけですね。たとえば、國家目標がいったん決まると、そこに向かって全社會が合理的に動員されるという社會です。これはドイツ型の近代化で、政治学の用語を借りて「コーポラティズム的な近代化」と言います。

これはトッド自身が言っているのですが、日本は割とドイツ型に近い國ということ。また、中國は割とロシア型に近いところがあるかもしれない、ということもトッドは言っています。さらに、アメリカは明らかにイギリス型と同じ傾向を持っているとトッドは言っています。

これはトッドの理論の種明かしの部分となります。この議論を下敷きにすることで『帝國以後』の議論も、あるいはウォーラステインの議論そのものも、少し発展性が出てくるのではないかと、思います。

■ アングロ・サクソン型の市場社會は実は特別な存在

さて、このように前置きをしたらうえて本筋の議論に戻っていきましょう。

今日の世界で今起こっていることは、基本的には國家と資本との關係であり、國家が資本に押しまくられている、ということなのです。國家を押しまくっている資本の論理にラベルを張るとすれば、「新自由主義」となる

わけです。このラベルは、「グローバル資本主義」と読んでもいいですし、グレイの言葉で言えば「グローバル自由主義のイデオロギー」ということなるわけです。しかし果たして、このような市場が普遍的なものなのでしょうか。もちろん、こういう疑義に対しては、「市場社会以外の経済体制なんかないでしょう」という答えが常に返されます。

ただ、たとえ「市場」自体は普遍的だとしても、現実にあるさまざまな国の市場社会というものは、やはり多様です。というのは、「市場社会」自体が近代化の過程で発達したものであって、各国ごとに、または各社会ごとに異なる性格を持った「市場社会」というものを構築してきているからです。

主流派の経済学等の経済モデルを見ていると、この現にある「市場社会」自体の多様性にどのくらい気づいているのか、やはり疑問を禁じえません。それで、果たして本当に正しいアプローチなのか、とってしまうわけです。

実際、現にある多様な「市場社会」には、いわゆる新古典派の経済学のモデルに親和的なケースとそうでないケースがあります。しかも親和的なケースの方が例外的なんですね。アングロ・サクソン型——すなわちトッド的に言うと、イギリスやアメリカ型の近代化を経験した、非常に強い個人主義的傾向を持った「市場社会」の場合は、普遍主義的な市場の概念と親和的だけれども、必ずしもそういう社会ばかりではないということです。アングロ・サクソンの「市場社会」について、グレイはそれを近代化以前から強い個人主義的傾向を持った社会と呼んでいます。トッドの場合は先ほど申しあげました通り、自由主義的な親子関係と非平等的な兄弟関係の結びつきででき上がった社会をアングロ・サクソンの社会の特徴として挙げているわけです。

この社会は、トッドの理論で言えば4つあるパターンのうちひとつだけというわけですし、グレイは、こんな社会はそもそもイギリスとアメリカのごく一時期にしか成立していないのだと言っており、非常に特別で、まれ

なケースなのだということを強調しています。そして、そのような特別な社会システムをよその国に押しつけようとするれば、当然あつれきが起きます。

自由市場の神話と現実

実際、歴史的な経験に照らして考えると、抽象的な自由市場というものが現実化したことは、過去にほとんど例がありません。そもそも自由市場へのコミットメントが、工業化であるとか持続的な経済成長の必要条件であったことは歴史的にはないわけですね。どの欧米先進国も工業化する時には決して自由貿易にコミットしていなかったわけです。そのとき、自国の市場を閉じていたわけで、工業化が終わった後に自由貿易と言いはじめたわけですね。自由市場へのコミットメントが必ずしも工業化や持続的な経済成長の必要条件であったことはないので。

もうひとつは、自由市場をつくるということは、要するに「国家が余計な介入をしないことなのだ」というふうに普通は言われるわけですが、実際に自由市場ができるとき、自由市場をつくる時には非常に強力な国家権力が必要になるということです。典型的なのがイギリスの囲い込み運動です。囲い込みというのはまさに、土地から農民を引き剥がして地主のものにするわけですから、その過程でたくさん裁判も起こるわけですが、裁判が起こるたびに国家は地主の味方をする。つまり、自由市場というものは決して国家による経済介入を引き揚げるとい話ではなく、むしろ資本から見て機能する自由市場をつくらうとすると、その分、強力な国家権力が要るのだということなのです。

さらにもうひとつの点が、これは先ほどすでに申しあげた点なのですが、自由市場をイデオロギー的にほかの国や社会に唱道する国家は、実は工業化以前から農村における個人主義が常態であったような非常に特別な社会と親和的なのです。社会学の教科書等を読むと、近代化というのは大家族から核家族への変化なのだと言われていて、割と当たっているケースもあるのですが、ただ普



遍的にそういうことなのではないのです。実は近代化が始まる前から核家族的な、つまり大家族ではない社会はけっこう存在しており、その典型がイギリスなのです。

イギリスは、12～13世紀ごろから核家族的な社会です。普通は、個人主義というものは、工業化、都市化が起こって初めて出てくるメンタリティーだと考えられているわけですが、当然ながら農村での核家族が当たり前の社会であれば、近代化においても、その分だけ個人主義的な傾向が強い社会になるわけです。そういう社会であれば、自由市場のような個人間の競争を前提とする経済体制に対してそれほど疑いを持たないかもしれないですけれども、そうでない土台の上に近代化が起こった社会では、自由市場のようなものをあまり強く主張すると、やはり齟齬、あつれき、摩擦が生じてしまう、ということになるわけです。

「市場の神話」はなぜ生まれたのか

「市場」というものは、経済理論で言われるほど普遍的でもなければ、良いものでもないということは割と多くの人が言っていますし、ある意味では左翼の常套句でもあるわけなのですけれども、ではいったい、「市場の神話」がなぜ神話となったのか、その構造をもう少し分析的に見るとどうなのか、ということについて述べたいと思います。

私がそこで頼りにしているのは、私の師匠のウォーラー・ステインのさらに師匠であり、ウォーラー・ステインの本の中にも名前が出てくると思うのですが、フェルナ

ン・ブローデルというフランスの歴史家です。

このことは、別にブローデルだけが言っているわけではないのですけれども、ブローデルが非常に印象的な言葉遣いをしているので、ブローデルによる市場のとらえ方、あるいは資本主義のとらえ方が、ここでの議論の補助線として便利だと思うのです。端的に申し上げて、「市場の神話」がなぜ神話かという、それは資本主義が邪魔をしているからだ、とブローデルは言うのです。ある意味で本質的には良いものであるはずの市場のオペレーションを資本主義が邪魔しているからだ、と。

この点については、多分首をひねられている方が多いと思うのです。「市場」と「資本主義」というものは同じものではないのかと。たとえば、社会主義経済が市場経済に移行するということを「資本主義」になるというふうに言うのだから、「市場」と「資本主義」とは同じなのではないか、というふうに思われるかもしれないのですけれども、ブローデルは「そうではない」と言うわけです。彼は「市場と資本主義はむしろ逆の概念だ」と言うわけです。

では、どういう意味で逆なのか。資本主義は市場がなければ存立し得ないので、その意味では確かに重なりあうわけなのですけれども、市場と資本主義というものを活動の方向性といいますか、オリエンテーションとして見たときに、それぞれ逆の方向を向いたものとしてとらえた方が見通しは良い、というのがブローデルの主張なのです。彼はフランスの歴史家なのでちょっと詩人的なところがあって、本当はこんなにすっきりした議論ではないのですけれども、それをあえて図式化して簡単にまとめてみます。

すなわち、「市場」というものは、その理念の形態においては完全競争の場です。そして、完全競争の場においては、需要と供給の関係で値段がひとつに決まることとなり、調整の過程はあるけれども、最終的には均衡点に達します。これが「市場」なのだと。そうやって、最も効率的な資源配分が行われるのが「市場」でしょう、というわけです。



でも、資本主義はそうではない。本当に一物一価が成り立ったら、資本主義的な利潤なんか上げられないでしょう。資本主義が大きな利潤を上げるその根拠というのは、一物一価のようにだれもが同じ情報、同じものにアクセスできる環境ではなくて、自分にしかアクセスできないチャンスがあるときに大きく儲けられるわけです。自分にしかアクセスできないチャンスをつくり出す行動が資本主義的なものであって、それは実は市場の中で行われる活動だけれど、むしろ反市場的だと言うべきではないか。市場というのは均衡をもたらすものであるのに対して、資本主義はむしろ均衡を邪魔するというか、均衡を一部なんらかの形でせきとめて、落差をつくって、その落差から儲けるものだろう。端的に言うと、市場の本質が競争であるとする、資本主義の本質というのはその競争にあらがって独占をつくり出す力のことでしょう。だから、資本主義的な利潤というものは本質的には独占利潤なのである、というわけです。

もっとも、独占利潤が本質的に悪いというわけではありません。いわば悪い独占利潤と良い独占利潤があるということです。たとえばカルテルをつくるとか、国家とかなんらかの政治権力と結託して、自分にしかアクセスできないようなビジネスをつくれればあまりフェアでない感じはしますが、技術革新とかなんらかの工夫によって、いずれはキャッチアップされるにしても、ある段階では自分にしかアクセスできない技術なり、何かビジネスモデルがあるというのであれば、当然それはフェアな独占利潤なので、別に独占だから悪というわけではないわけ

です。ただし、市場と資本主義の対比で考えれば、市場というものは基本的には競争を通じてあらゆるものを均霑^{きんてん}する、という性質のものであるのに対して、資本主義というのはむしろ差異をつくり出す、独占をつくり出す、反市場的な営みなのだということですね。

この点を敷衍すれば、市場は基本的に需要と供給の関係だけで動くわけですから、市場では経済活動は基本的にはファンダメンタルで動くけれども、資本主義というものは落差に注目するわけなので、投機が本質になるということにもなります。

市場においては需要と供給の関係で決まる価格に対して、そこに参加しているアクターというのはなんら影響力を及ぼせないわけですから、その意味でアクターは小さいわけですが、資本主義においては独占をつくり出そうと思えば、何か技術力を持っているとか、あるいは端的に資本力を持っているとか、国家権力と結びついているとか、なんらかの力を持った大きなアクターでなければならぬわけです。

したがって、資本主義というものは独占や投機や大きなアクターという特徴を持っている。つまり、資本主義の本質というものは金融とか国家権力とか、そういったところにあるのだ、とブローデルは言うのです。つまり、資本主義の本質は、市場ではなくて、金融権力や国家権力の方にあるのだ、というのがブローデルの議論なわけです。

ヘゲモニー国家が国際的な自由主義のイデオロギーを主張

ここで再び、世界システム論の方に議論を戻したいのですが、実はウォーラステインは、近代世界システムにおけるヘゲモニー国家というものはこれまで3つしか例がない、と言っています。それは17世紀のオランダと19世紀のイギリスと20世紀のアメリカです。ヘゲモニーのそれぞれのケースについての詳しい議論は今日は時間の関係でできないのですけれども、ひとつここで強調しておきたいのは、トッド流に言うと、この3つの国家はどれも自由主義プラス非平等主義、つまり理念として

の「市場」と親和的な文化的条件を持った近代化を経験した国なのですね。イギリスとアメリカは先ほど申し上げた通りですが、実はオランダもそういう国なのですね。

そして、実はこの3つのヘゲモニー国家は、オランダもイギリスもアメリカもですが、それぞれ自分がヘゲモニーのときに、国際的な自由主義のイデオロギーを主張した国家となるわけです。現在のオランダからはちょっと想像がつかないかもしれませんが、17世紀のオランダは世界で一番豊かな国でした。フェルメールをお好きな方もいらっしゃると思いますが、フェルメールはまさに17世紀のオランダを象徴する画家であって、後世に残る芸術というものは、やっぱりその時代に一番豊かな地域から出てくるわけですね。フェルメールの作品の卓越性について私には語る資格がありませんが、あの様式自体は当時のオランダ絵画共通のもので、どれも室内画ですね。

あれは実は儲けた企業家というか商人が自宅に飾るので、自分のライフスタイルがそこに反映されていて、しかもそれを自宅に飾る、という二重の意味が込められているのです。今のようなITの時代であれば、IT業界で成功した企業家が自分のリビングルームを最新のデジタル・デザイン家電で埋めるような感覚に近いかもしれません。ともあれ、17世紀のオランダはそういう国だったので、その当時のオランダにはグロチウスという国際法学者がいて、「自由海洋論」という本を書きました。オランダは国際法の歴史の中で、自由貿易の正当性を主張するということを世界で最初に行った国でもあるのです。

ただし、先ほど申し上げた通り、自由市場の理念というものは、現実にある市場社会とは別物です。自由市場のイデオロギーが当たり前に見えるような国は実はそう多くはないわけなのですね。具体的には、歴史上はオランダ、イギリス、アメリカだけがそういう国だったわけで、逆に言うと、オランダやイギリスやアメリカというヘゲモニー国家がリレー方式でだんだんと作り上げて

いった「近代世界システム」というものは、先ほど申し上げた「市場」と「資本主義」との間の区別を意識的に無意識的にか、無視する形で世界をつくり変えてきたシステムだ、と言っていると思います。

「スミスの発展」と「マルクスの発展」

ウォーラステインと世界システム論を長らく共同で研究してきたジョヴァンニ・アリギという研究者がいます。残念ながら3年ほど前に亡くなりました。このジョヴァンニ・アリギが晩年に書いた本の中で、このあたりのことをもう少しブローデルに即して、ウォーラステインの議論をもうちょっと敷衍しようじゃないかというので出てきた概念があります。それは「スミスの発展」と「マルクスの発展」という概念です。

今、ブローデルの話をしたので、この「スミスの発展」と「マルクスの発展」という言葉を導入するのは簡単です。

「スミスの発展」というものは、ブローデル的な意味での「市場」の発展です。厳密に言うと、「資本主義」よりも「市場」の発展のスピードの方が早いということなんですね。したがって、経済を拡大しながら、かつ、拡大した経済を速やかに均霑していく、そういう発展が「スミスの発展」です。

一方、「マルクスの発展」というものは、ブローデル的な意味での「資本主義」的な発展であって、これは「市場」の均霑化作用よりも「資本主義」による差異をつくり出すスピードの方が早いような発展のことです。すなわち、「マルクスの発展」とは、ヴォラティリティ（過剰変動性）を高める方向で作用してしまうような発展だ、ということですね。

アングロ・サクソン型の市場社会、つまりオランダやイギリスやアメリカがイデオロギー的に推進してきた市場化、あるいは市場社会、あるいは自由市場の拡大というものは、「市場」と「資本主義」の区別をつけていませんから、「マルクスの発展」に帰着するのに対して、アジア、特に中国には実は「スミスの発展」の長い伝統があ

るのです。ジョヴァンニ・アリギが死ぬ直前に『北京のアダム・スミス』という本を書いています。これは少し前に日本でも翻訳が出たのですけれども、その『北京のアダム・スミス』という本の中で、アメリカのヘゲモニーが限界を迎えた後、中国はヘゲモニーにはならないだろうが、中国を中心として「マルクスの発展」から「スミスの発展」にモードのシフトが起こるだろう、と書いています。

本日の議論では、中国が中心になるかどうかということとはちょっと置いたうえで、もう少し一般的な次元で話を整理しておこうと思います。

ブローデルの議論を踏まえると、近代世界システムの問題とは、「市場」ベースの発展ではなくて、「資本主義」ベースの発展で進んできたことにあるわけです。しかもオランダやイギリスやアメリカという市場に対して特別なイメージを持った社会が進めてきたシステムが今、限界を迎えているのだとするならば、まさにブローデル的な意味での「資本主義」をどう管理するのか、どういう形でそれが行き過ぎないようにするのかということをやほり考えなければいけないわけです。「資本主義」が市場のヴォラティリティを増幅し、それがわたしたちの社会的基盤を破壊することにもなるからです。

「市場」の本質的問題とは

恐らくグレイの本でも引かれていたと思いますし、ウォーラステインの本にも引かれていたと思いますが、カール・ポランニーという経済人類学者がいます。彼は「市場」の本質的な問題——もっとも彼は、「市場」と「資本主義」をあまり区別していないのですけれども、「市場」の本質的な問題点は「ヴォラティリティ」なんだと書いています。19世紀以降の市場社会——ポランニーは、それはイギリスがつくった、と見たわけなのですが、19世紀以降の市場社会というものは、市場で流通させてはいけないものを市場で流通させてしまったと書いています。

では、市場で流通させてはいけないものとは何でしょ

うか。それはひとつは労働力、もうひとつは土地、もうひとつは資本、この3つだとポランニーは書いています。では何で労働力や土地や資本というものを市場で流通させてはいけないのでしょうか。まず一方で、労働力とは人間または人間の生活そのものであり、土地とは自然そのものであり、資本というものは要するにお金のことから、いわば信用そのものであるわけです。他方、何かを市場で流通させるということは商品として扱うということですが、商品というものは本質的には販売のために生産されるもののことです。けれども、人間を販売のために生産できますか？ 労働力需要があるからもっと人間を増産してくれ、とそんなことが言えますか？ もっと言えば、労働力需要が減ったので、人間の在庫処分してくれ、とそんなことが言えるでしょうか？ 恐ろしいことに、現在はそんなことも言いかねない雰囲気がありますけれども。また、自然はまさに増産できないし、処分できないものですね。信用についても言わずもがなだと思います。

そういった本来的に市場での流通になじまないものをあえて商品であるかのようにみなして市場で流通させた場合、市場のヴォラティリティがある範囲におさまっていれば、それほど破壊的な効果は持たないわけですがけれども、市場のヴォラティリティがある限界を超えてしまうと、それが人間そのものの破壊、自然そのものの破壊、信用、つまり社会秩序のもとになる部分の破壊につながってしまって、社会的な基盤そのものが失われてしまう。これは非常に危険なことだ、ということをポランニーはすでに1950年代の本で書いているわけです。

アングロ・サクソン型の市場観というものは、新自由主義とほぼイコールなわけですがけれども、ブローデル的に言えば、「市場」と「資本主義」との区別を認識しないという点で非常に特別で、また危険な市場観なわけです。また、今お話ししたポランニー的な観点から見ても、非常に危険な市場観なわけです。この社会は、ヴォラティリティの増幅が社会をその基盤から壊してしまうということに対してきわめて鈍感なゆえに非常に危険なのです。



逆に、非アングロ・サクソン型——トッドの分類で言えば、フランス型、ロシア型、ドイツ型ですね。それらの型の近代化を経験した社会では、市場の外側にある社会的な条件——ある種の伝統であったり、慣習であったり、市場の外側にあるさまざまな制度が資本主義の抑制要因として機能しやすい傾向があるわけです。アメリカは、それらの要因をつかまえて「非経済的障壁だ」というようなクレームをつけ、これを破壊して、世界のあちこちでビッグバンを起こしてきたわけです。逆に言えば、アメリカやイギリスにとってみれば、それをわざわざ出張って行って壊さなければいけない程度に、市場の外側に資本主義を抑制するものとしていろいろな慣習や伝統を持っている社会があるということでもあります。でも、そういう社会は決して近代化が遅れているとか、そういうことはなくて、単にアングロ・サクソンの社会とは異なる近代化をしてきた国なのですね。

ただし、市場のヴォラティリティが社会を破壊することの危険について、アングロ・サクソン型の社会は、もともとそういう社会なので、市場のヴォラティリティに鈍感であるとともに、ある種の免疫を持っているわけです。

けれども、非アングロ・サクソン型の社会においては、もともと市場の外側にあったさまざまな制度や慣習が資本主義をチェックし、抑制してきたわけです。しかし、社会の外から力が加わって、そういう制度を全部破壊されて、アングロ・サクソン型の市場を強制されてしまうと、それに対する免疫がないので、一気に社会基盤の崩

壊までいってしまうのです。1993年以降、日本が経験しているのはそういう状況に近いのではないかと私は思っているのですが、いずれにしろ非アングロ・サクソン型社会に新自由主義が輸入されると、資本主義を抑制していた社会的条件が壊されて、しかもそれがなくなることにに対して免疫がないので、アングロ・サクソン型の社会以上に破壊的な帰結を招くことになるのです。

危険をもたらす近代化

ではいったいどうしたら良いのでしょうか。そのことを考えるにあたって、近代世界システムの歴史をさかのぼってみたいと思います。と言っても200年ぐらいしかさかのぼりませんが（笑）。けっしてイギリス型やアメリカ型の近代化が常に悪だという話がしたいわけではないのです。4つのパターンの近代化にはそれぞれに長所・短所があり、状況に応じてどのタイプの近代化が最も危険かということは変わる、ということをおし上げます。

先ほど少し申しましたが、19世紀の前半から1870年代ごろまでは一番危険なタイプの近代化は基本的にはフランスだったわけです。まだ始まったばかりの近代化を一気に最終段階まで持っていこう、というわけなので、非常に暴力的になりやすいわけですね。フランス革命には、ある種美化されたイメージがあるかもしれませんが、実際のフランス革命のプロセスは非常に血なまぐさいものであって、フランス型というのは非常に危険であったわけです。しかもその血なまぐさい革命をヨーロッパじゅうに輸出しようとさえしました。この危険なフランス型を周りにあるイギリス、ドイツ、ロシアが囲い込んで、フランス型の危険な近代化を抑制しようとした時代が18世紀の前半から後半の時期にかけての時代だったわけです。

しかしその後、その他の国でも近代化が進んで来て、後続の近代化、すなわちキャッチアップ型の近代化が出てくると、次に危険になったのはドイツ型です。イギリスやフランスが近代化したときには、近代化については一部の知識人がおぼろげに描いているような概念でしか

なくて、自分たちがつくろうとしている社会について本当に抽象的な概念しか持っていなかったわけですね。でも、ある程度近代化社会が形となってくると、後からキャッチアップする国というのは、「ああなればいいんだ」と、具体的な目標を持てるわけです。つまり、具体的な政策のゴールがあるわけですね。こういう具体的な政策的ゴールがあるときに、ドイツ型、つまりコーポラティズム型のように上から下までがっちり軍隊型の組織で国家が近代化すると、国中の全資源がそこに向かって集中され、しかもそれがまさに軍事的な形で組織されるので、国家目的に対して国全体が動員されやすくなります。実際20世紀の前半まで、ドイツ型が危険になって、このドイツ型に日本型も加えていいと思うのですけれども、その外側はイギリスとロシアとフランスが同盟を組んで連携して、それを囲い込んだのです。それが第二次世界大戦であったと言ってもいいかもしれません。

ところで、実はイタリアはコーポラティズム型ではないのです。イタリアという国は内部が多様なので、イタリアを全部ひとつにくくって何型とは言いづらいのですが、どちらかというロシア型に近い社会です。考えてみれば、三国軍事同盟の中でイタリアって早々に脱落してしまうのですよね。コーポラティズム的な社会にはついていけないのですね。これは脚注みたいなものですが、

さて、その次に危険になったのは何かというと、今度はロシア型です。20世紀の半ばになってくると、近代社会というものはかなりの程度完成形に近いものになってきていて、そうすると、当然ながら近代社会の“闇”の部分も見えてくるわけです。その“闇”の部分が見えたときに、それとは別の近代化——近代社会が持っている“闇”の部分を解決した、その次の近代化みたいなものを提示してほしいという欲求が生まれてくるわけです。ただし、実際には近代化自体はそもそも多様であり、近代そのものに全面的なオルタナティブが提示できるわけではないので、そういうものを提示しようとする、どうしても超越的なものにならざるを得ないわけです。

それを一番うまく展開したのがマルクス主義だったわけなので。マルクス主義とは、「おれについてくれば、近代とは別の、あるいは近代を超えた約束の地へ、救済の地に連れて行ってやるぞ」という思想で、一種のメシアニズムですね。そういう傾向に「わーっ」と流れやすい社会が今度は危なくなるわけです。それで、実際危なくなったのがロシアであり、ソ連でした。冷戦というものは、実際のところロシア型の近代化の危険性を、イギリス型、ドイツ型、フランス型の近代化した国で囲い込んで何とか抑えてきた時代だったわけです。長らくこのモードで社会科学というものはつくられてきたので、ロシア型の危険性に対しては既存の社会科学はすごく敏感なわけなのです。

けれども、ゲームのルールはもはや変わってしまっている、既存の社会科学も対応しづらくなっているのです。そこで、どう対応するのかということがまた新しい課題になっていると思うのですけれども。そして、今危険になってきているのが、まさにイギリス＝アメリカ型なのではないのかということですね。

おわりに

もう繰り返して申し上げる必要はないと思うのですが、オランダからイギリス、イギリスからアメリカに引き継がれてきたような形での市場社会の拡大については、もちろんそれがもたらした恩恵もあったわけですが、経済がここまで拡大・成熟した現在においては、それが持つ負の側面の方がむしろ問題になってきたわけです。

この後、イギリス＝アメリカ型の近代化、あるいはイギリス＝アメリカ型の市場理念でもって市場と資本主義の区別をつけないタイプの、あるいは市場と資本主義の区別に鈍感な経済体制をさらに拡大しようとする、その勢力を増すことは、アメリカ、またはその強いアメリカのパワーをどこが継ぐにせよ、非常に危険なことであって、それをどうコンテインする（封じ込める）のかということが、世界システム論的に見た場合に現代世界

の課題になっているのです。

具体的には、ドイツ型、フランス型、ロシア型等、非アングロ・サクソン型の近代化の経験をした社会が、連携して違うモデルを提示するということが非常に大事になってくるということになると思います。

実際のところ、非アングロ・サクソン型の近代化をしてきた国というのはそう多くないので、別に独仏露とか、

欧亜同盟とか、そんな具体的な国とか地域を出さなくてもいいわけなのですが、他方で「非アングロ・サクソン」という形でネガティブな形でしか提示できないものですから、なかなかそこにポジティブな理念を注入する、充てんすることが難しいことも事実です。そこに、今の近代世界システムが抱えている問題の困難さが表れている、というふうに思っています。

【注】

¹ 「前衛党」とは、マルクス・レーニン主義に則り、プロレタリアートひいては大衆を指導する政党のこと。出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』